

令和 7 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2024

課題番号：19K00498

研究課題名（和文）国家変容と国民文学運動に関する事例研究：近代ハンガリーの文学団体とカノン形成

研究課題名（英文）A Case Study on National Transformation and the National Literature Movement:  
Literary Societies and Canon Formation in Modern Hungary

研究代表者

岡本 真理 (Okamoto, Mari)

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：10283839

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究「国家変容と国民文学運動に関する事例研究：近代ハンガリーの文学団体とカノン形成」は、国家形成のさまざまな段階における国民文学運動の諸相を、近代ハンガリーを事例として検証を行った。

研究は、19世紀半ばと20世紀初頭をおもな2つの時代として取り上げた。1848年をめぐる文学的表象として詩人ペテーフイ・シャーンドルとその周辺の文学活動、国民文学の創出、国民演劇・民謡収集・児童文学などの黎明期を取り上げた。また、20世紀初頭の国土・国民の分裂前後の文学活動に焦点を当て、文芸雑誌『ニユガト』周辺の詩人や作家らの活動と作品を取り上げた。それぞれの国家変容の時代に表れるハンガリー性の表象を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ハンガリーはヨーロッパのなかで東方の後進的地域に位置し、近代の一世紀余りの時間に支配者と被支配者の立場、そして国民統合と国民分断の両方を経験したという特殊性を持っている。このようなハンガリーを研究の対象にすることによって、一つにはハンガリー文学という個別事例の具体的な様相を明らかにし、他方で国家変容のさまざまな段階、すなわち国民国家の形成期（国民的統合・拡大期）および国民国家の存続の危機（解体・分断期）において、国家変容が文学にどう影響を及ぼし、どのような文学的表象が現れ、カノン形成がなされるかという普遍的な問いにたいして知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study, "A Case Study on National Transformation and the National Literature Movement: Literary Societies and Canon Formation in Modern Hungary," explores how the national literature movement reflected different phases of nation-building in modern Hungary. Focusing on two main periods, the mid-19th century and the early 20th century, it first examines the literary activities surrounding the 1848 revolution, especially those of the poet Sandor Petofi and the emergence of national literature through theater, folk songs, and children's literature. It then turns to the early 20th century, analyzing the works and roles of writers associated with the journal Nyugat during a time of national fragmentation. The study investigates how representations of "Hungarianness" evolved across these transformative periods.

研究分野：その他のヨーロッパ文学

キーワード：ハンガリー文学 近代ヨーロッパ 国家と文学 国民文学

### 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、ヨーロッパ近代の文学における表象と国家形態の変容の関係について、ハンガリーという個別事例を研究対象として具体的に明らかにすることをテーマに取り組んできた。ハンガリーはヨーロッパのなかで東方の後進的地域に位置し、近代の一世紀余りのタイムスパンのあいだに支配者と被支配者の立場、そして国民統合と国民分断の両方を経験したという特殊性を持っている。このようなハンガリーを研究の対象にすることによって、一つにはハンガリー文学という個別事例の具体的な様相を明らかにし、他方で国家変容のさまざまな段階、すなわち国民国家の形成期（国民的統合・拡大期）および国民国家の存続の危機（国民分断・離散期）において、国家変容が文学にどう影響を及ぼし、どのような文学的表象が現れ、カノン形成がなされるかという普遍的な問いにたいして、より広い観点で一般的な知見を得ることを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究計画「国家変容と国民文学運動に関する事例研究：近代ハンガリーの文学団体とカノン形成」は、国家形成のさまざまな段階における国民文学運動の諸相を、近代ハンガリーを事例として解明しようとするものである。多民族帝国における被支配民族であると同時に王国内では他民族を支配する立場にあったハンガリーは、国民形成期の最終段階で国土の分割と民族の分断を経験するという、きわめて複雑な近代を経験した。本研究の目的は、このようなハンガリーをモデルに、国家形態のさまざまな段階で、どのような理念と表象が国民文学を担うものとされるのかを検証することである。特に、19世紀から20世紀初頭までに設立された諸文学団体とそれらが掲げた理念が、国家形成期や国家崩壊危機の時代にどのような文学的価値体系の構築を意図したか、それぞれの時期に活躍した詩人や作家のハンガリー性をめぐる葛藤に焦点を当てた。ハンガリーという地域的特殊性と同時に、近代国民国家と文学的カノン形成に関する普遍的特性を解明することを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究では、おもに2つの時代区分を設定した。一つは19世紀なかばの時期で、1848年革命（ヨーロッパ各地で同時的に発生した、いわゆる「諸国民の春」で、ハンガリーでは共和制体制などの自由主義的理念と同時に国民国家樹立を目指した戦いであった）に向かう時代を（1）「国家形成期」とみなした。もう一つは19世紀後半のオーストリア＝ハンガリー二重君主国期であり、20世紀初頭の第1次世界大戦からトリアノン条約によるハンガリー国土の分断と民族離散にかけての時代で、これを（2）「国家の分断・国民離散期」とした。

それぞれの時代区分で、

- （1）では1840年代の詩人たちの台頭と彼らの作品、革命を題材にした演劇の興隆、民族的な口承文学の収集・記録・出版の状況、女性作家と児童文学の芽生えを主な対象とした。
- （2）では、19世紀末のハンガリーナショナリズムの強化から、20世紀初頭の敗戦と諸革命の失敗、トリアノン条約による国土分断に至る時代の作家らの作品や文学運動を扱い、それらを通して「ハンガリー性」をめぐる葛藤を分析した。

### 4. 研究成果

（1）まず、20世紀初頭の作家コストラニーの政治的な立ち位置に焦点を当てた。国家変容とともに文学運動の主体は変化し、国民文学形成を志向して求められる表象も変化する。20世紀初頭のオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊とそれに続くブルジョア民主革命では、新しく設立したヴェレシュマルティ文学団体が王政の廃止と民主主義の実現を後押しした。これは翌年の共産主義革命とともに即座に解体され、それと同時に左派作家らによる新たな文学団体（ディレクトリウム）が立ち上げられたのもつかの間、革命崩壊後の王政復古によって、今度は逆に社会主義者らが粛清され、左派の作家らは国外へ亡命した。以上のようなめまぐるしい政治的变化の中に生き、コストラニーは自分の半生を長編小説『エシュティ・コルネール』に描いた。本研究の中でこの小説の翻訳および出版を実現させ、それと同時に、所収の解説論文では、近代ハンガリー文学のカノンとなった詩人たちが書いた革命や社会正義と、その近代文学の流れに一石を投じるコストラニーの自伝的小説のあり方を分析した。同小説の主人公「エシュティ」像を分析すると、合理主義では説明しきれない複雑で矛盾し、怪奇な性質もおびた捉えどころのないその存在が、政治の紆余曲折に翻弄された近代文学の状況を象徴していること、いわゆるカノンを批判的に再考させるものへと繋がるものである。

（2）さらに、コストラニー・デジェーとチャート・ゲーザというハンガリー近代が生んだ二人の作家が青春時代を過ごした世紀転換期のサバトカという都市に焦点を当て、この小都市が彼らの作家としての出発点にどのような影響を与えたのかについて考察した。コストラニーがそ

の作品群で故郷の町をどのように描写しているのかを調べ、さらにこの町が作家にとってどのような役割を果たしたのかを、町の歴史と先行研究における作家の青春時代の記録から検証した。コストラニ作品の中でしばしば皮肉を込めて「大平原の閉鎖的な田舎町」として描いた故郷の町は、実のところ、「閉ざされた、しかし高度な創造性をもった文化的小宇宙」となって、若き詩人たちを育くむ場所となったことがわかった。親や兄弟、従兄弟との強い絆を核とし、それを包むように級友たちや家族ぐるみの濃密な交流が縦横に織りなされ、さらに時代の最先端の建築様式を誇るサバトカの町並みがその「文化的小宇宙」を包み込んでいたという構図が浮かび上がった。結論として、コストラニが描写する主観的な風景と、実際にこの町が彼に与えた影響の間には、少なからぬ乖離があったことが明らかとなった。コストラニが「自らを拘束する閉塞的空間」として自身の作品に繰り返し登場させたこの町が、実のところは閉塞性や後進性と同時に緊密で高度な文化性を持っており、この相反する二面性をもって作家の成長期に大きな影響を与えたといえる。1920年のトリアノンによる国土分断の後には、サバトカは作家にとって「簡単に戻ることのできない愛すべき故郷」という表象へと変化した。この時代のハンガリー人作家の多くと同じように、国家の変容が自らの言語・文学・民族への意識の根幹に影響をもたらしたケースの一つといえる。

研究成果は、論文「大平原の小さな文化都市－作家コストラニと世紀転換期のサバトカ」『ハンガリー研究』創刊号（2021年3月）として発表した。

(3) 次に、19世紀なかばの文化的ナショナリズムの潮流の中で民衆世界のハンガリー語を再発見しようとする試みに着目し、この時代を代表する2つのハンガリー民謡集を比較検討した。エルデーイはハンガリー全土を対象に民謡を収集し、ハンガリー語新聞や雑誌などのメディアを通して呼びかけることで多くの収集協力者を得て、短期間で膨大な数のコレクションを実現した。

エルデーイは民謡収集の最終的な目的を国民文学の発展に据え、民謡はハンガリー語の近代化に豊かな栄養を与える源泉ととらえた。収集した民謡の種類は豊富である一方、採集地や情報源の性質にはほとんど注意が払われず、多くの場合で複数の歌を混ぜ合わせたり流行の大衆の歌謡と混同したり、方言要素を取り除いて近代的正書法に基づいて記したりした。エルデーイにとってそれはごく自然なことであり、民謡集の編纂を通して近代ハンガリー文学の「民衆国民文学(nép-nemzeti irodalom)」という方向性を打ち立てる役割を果たしたといえる。

これに対し、クリザの民謡集『野ばら』は、セーケイ地方の口承文化の諸相を記録することを第一の目的にした。地方ごとに細かく分類し、方言の特徴を可能な限り忠実に記録した。セーケイ地方の言語文化の全体像をありのまま記録にとどめようとするクリザの手法は、近代的な民俗学が確立する以前の19世紀なかばにおいて、先取的で挑戦的な試みであったといえる。

以上について、「エルデーイとクリザ 19世紀半ばの2つのハンガリー民謡集」『ハンガリー研究』第2号(2023年3月)にまとめた。

(4) 近代の詩人たちの「ハンガリー性」の表象をめぐる変化を検証するため、国民的詩人とみなされる3人の詩人のハンガリーとの関わりについて、戦争と民族的アイデンティティの観点から検証した。ペテーフィ、アディ、ラドノーティの3人は、生きた時代が異なるが、いずれも共通して「ハンガリー人」としてのアイデンティティを強く持ち続けながら、戦争の中あるいは戦争終結後まもなく命を落とした。ペテーフィは1848年革命を先導し、それに続く対ハプスブルクの自由戦争で闘い命を落とした。アディは第1次世界大戦を目の当たりにし、反戦や民族の救済を望みながらも叶わない現実に苦悩し、終戦まもなく病により死去した。第2次世界大戦中のホロコーストの犠牲となったラドノーティは、絶望と生への渴望のはざままで死の直前まで詩作を続けた。本研究では、戦争をテーマにした詩の分析を通して、詩人と戦争の関わりを考察した。その結果、彼らの戦争への関わり方が時代とともにさまざまに異なり、ハンガリー人というアイデンティティや詩人として何をなすべきかという使命感は歴史を通じて一様に捉えることができないことが明らかになった。これらについて、「ハンガリー詩人と戦争」『ウラリカ』第18号(2023年11月)に発表した。

また、本研究期間中にペテーフィ生誕200周年という記念の年を迎えたことから、ペテーフィの作品を文学教育の中でどう扱うべきであるかについても、実証的考察を行った。('今どきの大学生と近代ハンガリー詩を読む～学びと共感をめぐる一考察～')『外国語教育のフロンティア』第7号、2024年3月)

(5) 最終年度には、近代ハンガリー文学のカノン化の諸相を振り返った。19世紀初頭からハンガリー文学の活動の諸相として、これまでハンガリー語による新聞や雑誌メディアの発達とそこにおける文学作品の展開、劇場の整備とハンガリー語戯曲作品と外国戯曲文学の翻訳の発達、1848年革命と関連する戯曲作品、19世紀なかばから覚醒したハンガリー民謡の発掘と記録活動などに焦点を当てた。これらさまざまな文学活動が、ハンガリーナショナリズムが覚醒する同じ時期に活発化し、市民社会の変化とともに受け入れられていったことが明らかになった。

その上で、社会のメインストリームには現れないところで女性たちがハンガリー語による文筆活動を始めているのも、やはり近代の特徴である。女性の書き手たちは「正統な文学史」とい

うカノン形成から排除されながらも、公の目に触れないところで創作活動を行っていた。本研究では、しばしば「最初のハンガリー児童文学」とも表現されるベゼレーディ・アマーリアの『フローリの本』および自らの家族を重ね合わせた『フェルデン家の夕べ』という2作品にあらわれる彼女の思想を分析した。そこにはハンガリー語による保育や子女教育の必要性、教育者養成機関の必要性が語られており、国民形成期におけるハンガリー国民の政治的権利要求とハンガリー語による民衆のための保育や教育、そして女性の権利追求が相互に関連しながら強まっていたことが明らかとなった。この成果は、「近代ハンガリーの児童文学と女性をめぐる一考察：『フローリの本』とその時代」(『ハンガリー研究』第3号, 37-51)に発表した。

また、ハンガリー文学史の一環として、20世紀のユダヤ人文学とホロコーストについて次の中にまとめた。「ハンガリーのホロコーストと文学」(『EU百科事典』羽場久美子・田中素香・中西優美子編,丸善出版 298-299)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 岡本 真理	4. 巻 3
2. 論文標題 近代ハンガリーの児童文学と女性をめぐる一考察：『フローリの本』とその時代	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 ハンガリー研究	6. 最初と最後の頁 37～51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/100414	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本真理	4. 巻 18
2. 論文標題 ハンガリー詩人と戦争	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ウラリカ	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.60439/uralica.18.0_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本真理	4. 巻 7
2. 論文標題 今どきの大学生と近代ハンガリー詩を読む～学びと共感をめぐる一考察～	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 外国語教育のフロンティア	6. 最初と最後の頁 151-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/94991	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本真理	4. 巻 2
2. 論文標題 「エルデーイとクリザ 19世紀半ばの2つのハンガリー民謡集」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ハンガリー研究	6. 最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90931	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本真理 (監修・解説・翻訳)、篠原真帆、藤田茉優子、岩井奏子	4. 巻 2
2. 論文標題 「現代ハンガリー短編小説翻訳4選」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ハンガリー研究	6. 最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/90932	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡本真理	4. 巻 1
2. 論文標題 大平原の小さな文化都市ー作家コストラニと世紀転換期のサバトカ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ハンガリー研究	6. 最初と最後の頁 87-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 ペテーフィ生誕200周年によせてー今日の読者の視線から
3. 学会等名 日本ウラル学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 「自由、愛、この2つが僕には必要だ」 ハンガリーの国民詩人ペテーフィ・シャーンドル
3. 学会等名 大阪大学・マンスリー多文化サロン
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 19世紀ハンガリーの民謡収集 ~エルデーとクリザ~
3. 学会等名 日本ウラル学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 今どきの日本人大学生はペターフィをどう読むか
3. 学会等名 リストハンガリー文化センター（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 ハンガリー詩人と戦争
3. 学会等名 EU文芸フェスティバル（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 近代ハンガリー文学という文脈におけるコストラーニの「エシュティ」像
3. 学会等名 日本ウラル学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 大平原の小さな文化都市～世紀転換期のサバトカ
3. 学会等名 EU文芸フェスティバル（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本真理
2. 発表標題 コストラニーとチャートの町サバトカ
3. 学会等名 日本ハンガリー学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 羽場久美子・田中素香・中西優美子編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 670
3. 書名 『EU百科事典』	

1. 著者名 岡本真理	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826
3. 書名 ハプスブルク事典	

1. 著者名 中欧・東欧文化事典編集委員会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 866
3. 書名 中欧・東欧文化事典	

1. 著者名 岡本真理	4. 発行年 2019年
2. 出版社 未知谷	5. 総ページ数 311
3. 書名 エシュティ・コルネール もう一人の私	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------